

BOOK REVIEW 1

理系のための口頭発表術 - 聴衆を魅了する20の原則 -

ロバート・R・H・アンホルト 著, 鈴木 炎 / イイイン・サンディ・リー 訳
講談社 ISBN-13:978-4062575843 2008年発行

評者：渡辺哲也（国立特別支援教育総合研究所）

研究はテーマ探しから論文執筆までいくつもの段階からなる。その中で、工学系の人間ならシステムや実験装置の開発が大切だという人は多いだろう。しかし、発表が大切と言いつける人は少ないかと思う。学生なら先生に指示されたから仕方なしに、職業研究者なら開発を公的記録に残すため、または学会に参加するために惰性的にこなしていないだろうか。実際、発表日の前日になって、「明日のプレゼン資料を今晚中に仕上げないといけないよ」と話している人もいる。

発表は本来、研究成果をアピールする最も華々しい機会だと思う。新聞やテレビで紹介されるほど多くの人には届かないけれど、同じ専門分野の研究者数十名の耳目を15～30分の間集められる好機である。自分が新たに開発・発見したことを多くの人に知ってもらい、面白いと思ってもらいたいなら、この短い時間を有効に使わない手はない。

発表の重要性は分かった、しかし、発表の上手い下手は天性のものではないのか？確かに性分の影響も否めないが、意識的な練習と経験を積み重ねて「技術」を磨くことで、聴衆を惹き付けるレベルに到達する道は誰にでも開かれている。その技術錬磨を指導してくれるのが本書である。発表準備段階の留意点から、ストーリーの作り方、パワーポイントスライドやポスターの作り方、声の出し方、立ち居振る舞い、質問への答え方まで、具体的に教えてくれる。

例えば発表準備段階では、聴衆がどんな人たちかを予測することが大切である。同じ研究テーマについて話すにしても、大学の学科内シンポジウムの場合、学会の研究発表の場合、研究所公開日の場合でそれぞれ焦点と話の組み立て方が違ってこよう。自分の話から相手は何を知りたいかを考えて、発表準備を進めなくてはならない。

発表のリハーサルも必須である。学生なら研究室で練習をするだろうが、職業研究者はどうだろうか。率直

に意見してくれる人にリハーサルに付き合ってもらおうのが理想的だが、周りが皆忙しいとか、気さくな人が学科内にいないといった理由で練習を怠っていないだろうか。一人でも、リハーサルを録音または録画して癖を見つけるといいう手立では取れる。リハーサルではないが、先日国際会議における発表をビデオ録画してもらった。あとで見たとこ、下を向いてパソコン画面を見ている時間が長いという自分の欠点を明らかにできた。

すぐに役立つスライドの作り方を抜き出してみよう。

背景は図と文章とよいコントラストを成す抑えた色にする、表や複雑な数式を避けて図を使う、1枚のスライドに要点は一つまでとする、図には短く明瞭なラベルを付ける、アニメーション・スライドの切り替え効果・効果音は多用すれば「逆効果」になる、発表の終わりに結論を「一言」で表して聴衆に持ち帰ってもらう、などなど。よい例と悪い例が示されるので納得しやすい。

発表時は演壇の後ろに隠れずに演壇から歩み出て話すこと、レーザーポインタでスクリーンを示すときは聴衆に背中を向

けないことといった立ち居振る舞いのポイントは、本書を読んだあと気をつけるようになった。

本書の有効性は訳者自身が示している。訳者も現役の理系研究者であり、この本を使って学生のプレゼンテーション力を半年の授業と演習を通じて向上させてきた実績を持つ。

本書が示す重要ポイントをすべて習得することは難しいだろう。それでも、簡単なことを一つでも次の発表から実践し、発表の質が変わったと自分自身で感じられるようなら、この本を読んだ意味は十分にあったかと思う。ぜひ多くの人が本書を手に取り、来年の発表大会が、居眠りする暇もない魅力的な発表で埋まることを期待したい。

最後に一言。発表は時間通りに終えること。そんなわけでこの原稿もここで終わります。

